

(3) 生涯教育の構想をめぐって

持田 栄一

東京大学

(一) 生涯教育論と教育改革

生涯教育論を成人教育の組織原理と考えている向きもある。しかし、それは、社会教育をふくめて生涯に亘る教育をシステム化しインテグレートしようとするもので、この意味で、現在課題となっている教育改革・教育の計画化の基本原理に外ならない。われわれは、このような視角から検討をすすめていくことが必要である。

それは、教育を自己教育としてとらえることを主題に、いままでの教育が学校教育にワイ小化されていたことをあつため、誕生から死にいたるまでの各年齢段階の教育を家庭・学校・社会を貫通して、システム化しインテグレートしようとするものである。

現在のところ、生涯教育論への問題関心には教育現場関係者までふくめて、全教育界の課題となっているとはいえない。それは、現在のところ一つの政策「理念」であり、具体化されるまでにはいたっていないと考えられている。しかし、つぎのような現実の諸問題は生涯教育構想と密接にかかわっている。幼児能力の早期開発と幼児教育振興をめぐる問題、週休2日制をめぐる家庭・社会教育施設と学校の機能再配分の問題、夏期休暇中の児童生徒指導の社会教育への移行（プール指導や移動教室等）、教育と福祉サービスの連繫（幼保一元化、児童館の教育機能、身障児福祉施設と特殊教育の連繫の問題）等々。

われわれは、上記のような現実の諸問題を解決していく方法を追求していくなかで、生涯教育論を具体的に追求していくことが必要である。

(二) 生涯教育論の本质——近代公教育の「改良」と「改良」による体制の安定化

生涯教育論は、1950年代後期から一般化するようになった技術革新と情報化、それに伴う国民生活の近代化に対応するための教育戦略といつてよい。したがって、「政策」として提起される生涯教育論は、近代公教育体制を前提とし、それとより安定化させるために、それに一定限度の「改良」を加えようとすることを課題としている。そこにおいては、自己教育が強調されているか、それは、近代教育における科学と人間、教育内容と学習主体の生活を支える教育と自己教育の二元論的理解を問いかえするなかで、自己教育を学習主体の生活的実践そのものの基礎とし、その全体性において理解したものではない。また、そこでいう自己教育論は依然個体的に認識されており、この意味で、近代における教育本質観の地平をこえるものではない。このようなところから、そこにおいては、せつ角の自己教育の主張が、近代に伝来の「与える教育」を変革することにほかならなりでこれを補充することとなっているのである。かくて、生涯教育論における家庭・社会教育の振興は、近代公教育における学校のあり方を変革することにほかならなりで、それを最適化することとなっている。このような生涯教育論と相伴して幼児教育までを悪しき意味で学校教育化することとなる。

一方、政策として提起される生涯教育構想はすでに指摘したように、近代公教育体制を前提とし、したがって「国家」を主体として教育を「社会化」しようとするものであるから、生涯

に亘って教育がシステム化されインテグレイートされることは、すなわち、よりトータルに教育に対する国家支配が貫徹することを意味している。

(三) 生涯教育論批判から批判生涯教育論へ

現在、政策として提起されている生涯教育構想には、以上のような問題点が多く含まれている。このようなところから、教育運動関係者は生涯教育論に対しては批判的であり警戒的である。しかし、その批判が以上のべたような生涯教育論の本質を正しく認識し、正当な批判を加えているかというところとはいえない。そこでは、いわゆる民主・国民教育論をきき、現在「政策」として提起されている生涯教育論を近代的教育価値——教育基本法体制——民主・国民教育をつき崩す「反動」としてとらえられている。生涯教育論をもって、近代における学校の解体論であり死滅論とする批判が主流となっている。このようなところから、そこでは、生涯教育論批判は聞かれるが、それに代る批判計画（一代案）は必ずしも明確でない。戦後の教育基本法体制——民主・国民教育の観点から理念的に強調されているのにとまどっているのである。

さきにものべたように、現在「政策」として提起されている生涯教育論は、近代公教育体制を前提としながらも、それに一定の「改良」を加えることによって体制の安定をはかろうとするものである。それは、民主・国民教育論かのように近代公教育をつき崩す「反動」ではなく、一定の「改良」と「革新」性をもっている。ただし、そのような「改良」的、「革新」的措置が、近代公教育体制を問いかえさないう

まにすすめられるところに問題があるのである。そうだとするならば、生涯教育論批判は、近代公教育体制そのものを問いかえし、これを改革していく実践と運動のなかで、生涯教育論が提起した課題を、「土かえのまねとは異った地平においてとらえかえていくことを主題としなければならぬ。このような観点に立ちながら、われわれは、生涯教育批判と批判生涯教育論に発展させていくことが必要である。

そのため、どのように考えるか、本シンポジウムにおいては、そのような批判生涯教育論の骨子についてのべることを予定している。